つだ　さうきち著

思想・文藝・日本語

岩波書店刊行

昭和三十六年六月三日　第一刷發行
昭和三十六年九月二十日　第二刷發行
©
思想・文藝・日本語
定價千五百圓

著者　津田左右吉

發行者　東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
岩波雄二郎

印刷者　東京都青梅市根ケ布三八五番地
山田一雄

發行所　東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三　株式會社　岩波書

落丁本・亂丁本はお取替いたし

本製木青・刷印社興精

まへがき

子どもの時から作文が好きで、半紙を綴ぢ合はせた帳面をこしらへては、何かかゝ書きつける癖がついてゐたが、何を書いてゐたかは、全くおぼえてゐない。たつた一つ小學校の高等科の生徒であつたころのことだらうと思ふが、「遲々たる澗畔の松、鬱々として晩翠を含む、」といふ朱子の「小學」の外篇にある句をおもしろく思ひ、あれを使つて、その對になる句を新しく考へ出さうと、庭においてある大きな石に上つたり下りたりしていろ〳〵工夫をしたが、とてもむづかしくてそれができず、とう〳〵やめてしまつたことのあるのが、思ひだされる。生意氣なことを考へたものだと今からは思ふが、實はさうではないので、昔の書生は文章を書く時に古人の句などでおもしろいと思つたものは、よく記憶してゐて、自分の文章を書くばあひにそれを利用するのが例になつてゐた。このことは曾て「子どもの時のおもひで」のうちにも一言いつておいたやうなきがする。文章の美しさとその力の强弱とは、かういふ修辭を用ゐることの巧拙及び功過の如何によるところが多いので、おのづからかゝることに注意がむけられたのであらう。僕らも子どもながらそのまねをしたのである。たゞ明治時代以後においては西洋の名家の句をかりるのと、昔のシナのをまねるのとの違ひがあるのみであつた。論文に論理の精粗と資材の正否とが重んぜられ、さうしてそれによつて文章の價値の定められる今日においては、かゝる修辭的技巧はおのづから等閑視せられて來たので、今日ではそれが殆ど廢れてゐるが、明治時代までは、名文といはれたものでエマスンとかマカウレイとかの句を利用しないもの

は、殆ど無いといつてもよいほどであつたのは、これがためであらう。

かうはいふものの、僕はそのころまでに論文らしい論文を書いたことも無く、藝術とか文藝とかいはるべき作品を世に出したこともない。僕の筆にしたのは、せい〳〵輕い評論めいたものの幾篇かに過ぎない。こゝにいつたのは、一つは何かを書かうとした時に何か據るところが欲しかつたのと、それでゐながら僕自身の製作であることを示したかつたのとの、ためであつた。純粹な學問上の論文は別として、さうでないものはこれだけの用意をしたほうがよいと思つたのみのことである。子どもの時の話をしたのは、たゞそのためである。このやうなことを書き添へてこの書のまへがきにかへる。

昭和三十六年四月

つだ　さうきち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

まへがき

第一　日本語雜感……一

一　日本語の現狀を憂ふ……一

二　「新かなづかひ」について……九

三　固有名詞のかながき……三六

四　敬語について……四四

五　外國語の亂用と日本語のロオマ字書き……五三

六　日本語に多いいひかたの一つ……五七

七　譯語から起る誤解……六五

八　自由といふ語の用例……七四

九　萬葉集の第一歌……八五
第二　思想史斷片……八九
一　學問の本質……八九
二　諸民族における人間概念……一四一
三　日本思想形成の過程……一五一
四　今日の生活と昔からのならはし……一七三
五　日本人の風習の一二について……一八六
六　日本の家族生活……二〇〇
七　近代日本における西洋の思想の移植……二二二
八　教育に關する勅語について……二四二
九　『菊と刀』のくに――外國人の日本觀について――……二五二
十　愛國心……二八二
十一　わたくしの信條……二九七
十二　書齋漫筆……三〇三

イ　讀むことと書くこと……三〇三
ロ　書もつについて……三一四
十三　シナ藝術に關する斷想……三二四
イ　日本の樂器……三二四
ロ　シナ畫の氣韻論……三三一
ハ　シナ藝術の一側面……三四一
十四　シナ學に關する思ひつき……三五六
イ　シナ思想研究の態度……三五六
ロ　日本におけるシナ學の使命……三六六
ハ　諸生規矩階級・讀書路徑……三八六
ニ　「儒者が政治をすれば世が亂れる」……三九二
第三　平泉の文化と中尊寺……三九八
第四　おもひだすまゝ……四二四
一　大歌所……四二四
二　新古今集の歌の技巧の一面……四二六

三　ハックニシラスといふ語……四三三
四　國巢と書かれた語……四三六
五　「中今」といふ語……四三八
六　「掩八紘而爲宇」といふ語の意義とその出典……四四〇
七　漢文とラテン語……四四七
八　シナの詩の日本語よみ……四五一
九　漢文の日本語よみ……四五七
十　シナの詩の日本語譯……四六二
十一　シナの古典の文章と口にいふことば……四六五
十二　春　恨……四六九
十三　秋の悲しさ……四七四
十四　四季の歌……四八〇
十五　山水の愛翫……四八四
十六　詩の句の對耦……四八六
十七　シナ人の懷古の詩……四九〇

十八　シナ人の戀愛詩……四九六
十九　香屑集……四九九
二十　ナリシマ　リュウホク（成島柳北）の詩……五〇一
二十一　平安朝の詩の作者と中晩唐の詩……五〇八
二十二　平安朝の物語とシナの説話……五一五
二十三　生れた日と死んだ日……五一九
二十四　生れた家、住んでゐた家、おくつきどころ……五二三
二十五　おのが死、おのが墓……五二七
二十六　葬　儀……五三三
第五　續おもひだすまゝ……五三八
一　玉　蟲……五三八
二　庭は雜草の茂るにまかせて……五四〇
三　自然の風土と習慣……五四三
四　僕のしごと部屋……五四九

五　山小屋の床の間……五五一
六　食もつの味はひ……五五七
七　刀　剣……五五九
八　ハンガリ事件につれて愛國詩人ペトフィを想ふ……五六三
九　梵鐘のひゞき……五六七
十　「朝ぎよめすな」……五六九
十一　春の夜の夢……五七二
附錄　こどもの時のおもひで……五七五
あとがき
所収論文一覧表
索　引

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一　日本語雜感

一　日本語の現狀を憂ふ

日本語はむつかしい、といふやうな意見を近ごろときゞ〳〵何かで見かける。これは日本語を話すことがむつかしいといふのか、文字に書かれた日本語を解することがむつかしいといふのか、またはその兩方を含めていふのか、人によつてその意味が違ふやうでもあるが、何れにしても日本人が日本語をむつかしいといふのは、ふしぎなことのやうな氣がする。子どもの時から日常使ひなれて來た日本語が、むつかしいと思はれるはずは無ささうだからである。そこで、なぜ、或はどういふ點が、むつかしいと思はれるのか、ちよつと考へてみたくなる。

一々細かに氣をつけてさういふものを讀んだのではないが、話すことがむつかしいといふのうちには、同じことでも人によりばあひによつてことばをかへねばならぬ、いひかへると敬語またはそれに類するものがいろ〳〵あつて而もその使ひかたがさま〳〵である、それがむつかしい、といふのがあつたと思ふ。日本語に敬語やそれに類するものが多くまた複雜であることは事實であるが、それはことばの問題であるよりは、社會生活の風習とそれに伴ふ生活感情とに關することである。日本人には他に對してみづから謙抑することを禮儀として尊重する風習があつて、それ

が敬語となつて現はれるのであるが、さういふことばかりではなく、例へば人として好ましからぬこと忌むべきこと、その最も大なるものは死であるが、さういふことは明らさまにいはないのが、禮儀とせられるやうなことがある。たゞかういふ敬語などの用ゐかたは、自己に對する間がらの親疎とかその人の社會的地位とかによつてさま〳〵になつてゐるが、それらのことは社會生活における一種の習慣として、子どもの時からいつとなしにきゝなれいひなれて、身につけて來たことであり、普通の教養のある家庭で育つたものは、意識せずしてそれを適當に用ゐてゐる。從つてそれはむつかしいことではない。日本人のやうな風習の無いヨウロッパ人などには、日本語のかういふいひかたを理解することがむつかしく、それを適當につかふことは一層むつかしいであらうから、彼等がこの點で日本語がむつかしいと思ふのはむりも無いが、それは風習が違ひ生活感情が違ふからである。もし日本人がそれにつられて日本語はむつかしいなどといふならば、それは笑ふべきことの至りである。

但し最近では、人といふものの平等觀とか、すべてのことがらはありのまゝに明かに表現すべきだとかいふ特殊の考から、かういふ禮儀を否認し、ことさらに一般の風習に背いたことばづかひをする人たちもあるやうであるが、日本人のかういふ風習には、長い間の歷史が養つて來た纖細な生活感情が籠つてゐるので、輕々しく棄て去るべきものではない。（それには過度に用ゐることの弊害も伴つてゐるであらうが、世の中のことに用ゐかたによつて弊害の伴はないものは無い。その弊害の起らないやうにするのが教養によつて形づくられる良識のはたらきである。）平等觀もよいし、明白に表現することもよいが、それにはそれを適用すべき方面が別にある。或はまた何ごとをも階級觀念で說明しようとする人たちは、敬語などの如き禮儀の現はれをも、さういふ考へかたで解釋し、被壓服者の壓服者に

對する服從の表示であるから、排斥しなければならぬ、といふかも知れぬが、それは禮儀、おしひろめていふと他人に對する道德的行爲を、他から强制せられるものである如く思ひ、人の心情から出るものであることを解しないものである。

勿論、かういふやうな禮儀は日本人に限つて行ふのではなく、ヨウロッパ人の教養ある社會には、日本人のとは違つた方面または形においてのそれがあつて、それはやはり纖細な生活感情の表現であるから、日本語にあるやうな敬語などを用ゐなくても、彼等の社會生活は成りたつのであるが、それもまた彼等の歷史が養つて來たものであり、さうしてそれが何等かの形で言語の上にも現れてゐると考へられる。從つて日本語がヨウロッパ人にとつてむつかしいことばであると同じく、フランス語もイギリス語もドイツ語も、この意味で日本人にはむつかしいことばである。しかしそれは、彼等がそれ〴〵におのれらの國語をむつかしいものだと思つてゐる、といふことではない。かう考へて來ると、日本人が日本語をむつかしいものと思ふのは、ヨウロッパ人などの日本語に對する評判をそのまゝ口まねしてゐるものであるかも知れぬ。或は日本人が歷史的に作りあげて來た一般的教養を、いひかへると日本の獨自の文化を、排斥する意味でいつてゐるのかも知れぬ。が、この二つの間には相互の關聯がある。日本人としての教養を排斥することは、今日の一般の風潮では、ヨウロッパ人などの考へかたや習慣に追從することなのだからである。しかしヨウロッパ人には別の教養があることも、その教養を日本人が身につけることのむつかしいことも、一般には考へられてゐないのではあるまいか。

話がわき途に入つて來たやうであるが、もとへ歸つていふと、日本語をむつかしいものとする理由として、一つの

ことばにもいろ〳〵の變つた意義があり、それと共に同じ意義の多くのことばがあるから、それを適當に使ふことは容易でない、といふこともいはれてゐたやうに思ふ。一つのことばの意義が人の思索の細かくなるに從つていろ〳〵に分化したり、知識の新しく生ずるにつれてこれまでに無かつた意義が附加せられたり、またはその他のいろ〳〵の道すぢいろ〳〵の事情によつて、かういふことが起るのであるが、それは日本語のみのことではなく、どの國語でも同樣である。なほ意義は同じであるとしても、使ひかたいひかたや語調語勢などの違ひによつて、その語感や色あひの違ふことも多いが、これもまた同樣である。かういふことは初めて日本語を學ばうとする外國人にはむつかしく思はれることであるが、日本人がそれをむつかしいと思ふのはをかしい。

しかしこれについては、日本語に特殊のことがらもあるので、それは漢語の語彙が多く日本語のうちに入つてゐて、それが日本語の語彙として用ゐられてゐることである。そのうちには、漢語でありながらその意義が原義とはいろいろの程度で、或は全く、違つてゐるもの、または漢語風に日本で新に造つたもの、などがあつて、それがもとからの漢語と混雜して用ゐられてゐるし、なほ漢語の語彙と、その色合ひなり語感なりは違ひながら、ほゞ同じ意義の日本語の語彙が別にあつて、それがやはり漢語のと混雜して使はれてゐたり、さういふやうなことも少なくない。漢語の語彙といつてもその聲音はすつかり日本化してゐるから、口でいふばあひにはそれがきはだつては耳に感ぜられないが、しかしもと〳〵漢字の字音として知られもし學ばれもしたものであるから、口にそれをいふ時にも漢字がそれに伴つて目に浮ぶ。特に熟語となつてゐるものにおいては、その構成が日本語とは全く違つてゐるから、なほさらである。だから日本語の間にそれがまじつてゐると、よし日本語の語法によつてそれが用ゐられてゐても、どうしても不

調和なところがあるから、そこでそれを含む全體としての日本語がぎごちないものとなり、そこから何となくむつかしいもののやうな感じがする、といふこともある。のみならず、上にいつたやうな事情があるために、漢語の語彙の意義を知るには漢字の知識が必要であるから、そこで日本語の語彙としての漢語を用ゐるにも、漢字とその用ゐかたとを知らなくてはならず、そこからもまた日本語を話すことはむつかしいといふことになる。同じ文字を用ゐ同じ系統に屬する外國語の語彙を自國語のうちに取入れて話すのと、言語の性質が日本語とは全く違ひ、またその違ふ一語一語の表現である漢字と離しては取扱ひがたいところのある漢語の語彙を、日本語のうちに取入れて話すのとは、趣が違ふから、ヨウロッパ人などにとつては、日本語はふしぎな國語であるやうに感ぜられ、この點でむつかしいものと思はれるでもあらう。日本人自身においては、かなりの程度の教育をうけて世間なみの知識をもつてゐる限り、さういふ感じはしないが、考へてみれば、さういふ感じのせられる理由のあることはわかる。

もう一つきがつくのは、日本語の語法がむつかしいやうに感ぜられてゐるのではないか、といふことである。エド時代の學者の研究によつて一般に正統的な日本語の語法と考へられて來た文語の語法と、明治時代から次第に研究せられては來たがまだ十分に整つてはゐないやうに思はれる今日の口語の語法とが、文字に書き表はすばあひに、いろいろ絡みあつたり混雜しあつたりして、口語によることが主になつてゐる今日の文章が、實はかなり亂調子なものであるのみならず、日本語としてはむりなところのある漢文の讀みかたや、ヨウロッパ語のいひかたの日本語に移されたものなども、それに加はり、その上さらに、日本語を正しく書かうとする心用ゐの薄い人たちの書いたと思はれるものが、いはゆるマスコムミュニケイションの主要な機關である新聞などの上に少なくないやうに感ぜられること、ま

た不用意に定められたとぼくには考へられる新かなづかひといふものが、今の口語としての日本語を、法則の無い亂雜なもののやうに見せる虞れのあること、などもそれを助け、ことばやことばづかひが文字に書かれたものにひきずられることの多い今日では、日本語をむつかしいものに思はせる一つの力となつてゐるのではなからうか。法則の無い亂雜なものほど、むつかしいものはあるまい、と考へられる。これは今の日本語の語法に特殊な點のあることについていつたのであるが、ヨウロッパの諸國語とは言語の系統の違ふ日本語そのものの語法が、ヨウロッパ人などにはむつかしいといふことも、あるのであらう。けれどもそれは、日本人には彼等の語法がむつかしいのと同じである。日本人から見ると、彼等の語法には、思想や情感を表現するには必要の無い、よけいのものがあるし、それでありながら表現を曖昧にするやうなものもある。ヨウロッパ語の知識を殆どもたないに等しいぼくがかういふことをいふのは、僭越でもあらうが、ぼくはかう思ふ。これは今日のヨウロッパ語の語法が彼等の精神史と言語そのものの歴史とによつて形成せられたものだからであらうから、それと全く違ふ歴史によつて形成せられた日本語を用ゐてゐる日本人がかう思ふのはむりではあるまい。外國語のむつかしいのはお互のことである。だからこれは日本語がむつかしいといふ理由にはならぬ。

話すことがむつかしいといふ方はこれだけにしておいて、次には文字に書かれた日本語を解することがむつかしいといふ方のことを考へてみる順序になるが、これは實はこれまでいつて來たことでほゞ盡されてゐる。たゞ書かれた日本語には、よしそれが口語であつても、漢語の語彙を用ゐることが口でいふばあひよりはおのづから多くなる傾向があり、而もそれが概ね漢字で寫されてゐることと、いはゆる文語に特有な語彙とその用ゐかたと、從つてまたその

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com